

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520089

研究課題名(和文) 戦後日本版画の世界進出と国際交流—展覧会・コレクター・作家交流—

研究課題名(英文) International reception and artistic exchange of post-WWII Japanese prints: exhibitions, collectors and artist contacts

研究代表者

桑原 規子 (KUWAHARA NORIKO)

聖徳大学・人文学部・准教授

研究者番号：90364976

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本の版画が国際的に注目され、評価された絶頂期ともいえる1950年代から1960年代を中心として、日本版画の世界進出と国際交流の実態を多角的に把握することを試みた。海外で開催された日本版画展覧会のリスト作成、国内外の欧米人コレクターの資料収集や関係者への聞き取り、シアトルを中心とする日米の作家交流の現地調査を通して、戦後日本版画の世界に於ける位置とその独自性を検証し、その成果を著書や論文で発表した。

研究成果の概要(英文)：This research investigated aspects of international reception and artistic exchanges of modern Japanese prints during the period from the 1950s to the 1960s, when international attention on and estimation of Japanese modernist prints peaked. The research resulted in: a list of overseas exhibitions of modern Japanese prints; compilation of material and on foreign collectors and interviews with relevant individuals; and documentation on the artistic exchanges in and around Seattle.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 美学・美術史

キーワード：日本美術、版画、占領期、国際交流、アメリカ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は研究課題「日本近代版画の海外紹介とその国際的評価に関する研究—昭和初期から占領期まで—」(平成17-19年度科学研究費補助金基盤研究(C))に基づき、戦前から占領期までの日本版画の評価の変遷、欧米人コレクターが日本版画の国内外の評価に果たした役割について研究を進めた。

その結果、占領期の欧米人コレクターが果たした役割は大きいものの、占領期はそれ以後の日本版画の世界進出を準備した予備段階であり、本格的に日本の版画が海外で収集・展覧・研究されていくのは占領期以後という結論に達した。したがって本研究は、昭和戦前期から占領期までの調査を土台として、それを発展的に研究したものである。

2. 研究の目的

日本において版画（創作版画）は、戦前まで洋画や日本画より一段低い美術と見なされていた。しかし、戦後になると、占領期日本に進駐した欧米人たちに高く評価・蒐集されるとともに、占領解除後にはベネチア・ビエンナーレなど海外展で次々と賞を獲得、国際的に高い評価を得るようになる。また、1950年代後半になると日本の版画家たちは海外に渡航し、日本版画の技法を実地に指導、展覧会を開催し、現地の作家やコレクターと交流した。一方、海外での日本版画に対する評価や関心の高さは日本の美術界にも反映され、1957年には東京国際版画ビエンナーレ創設を導くこととなる。

本研究は、このように日本の版画が国際的に注目され、評価された絶頂期ともいえる1950年代から1960年代を中心として、日本版画の世界進出と国際交流の実態を、①展覧会、②コレクター、③作家交流の側面から多角的に調査研究し、戦後日本版画の世界に於ける位置と独自性について検証することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、その課題の性質からして国内と海外での調査を並行して行う必要があったので、海外在住の研究者の協力を得つつ、以下の方法で研究を進めた。

(1) 海外で行われた国際展・グループ展・個展に関する基礎的データの収集（展覧会目録、雑誌・新聞記事、展評、関係作家のスクラップブック、日記、書簡などを中心とする）

(2) 欧米人コレクターに関する調査（彼らの収集作品および著作物研究、関係者への聞き取り。具体的には、ハワイ大学のスタッター資料、シアトルのブレイクモア財団資料の調査、ボストン美術館、ロサンゼルス・カウンティ・ミュージアム、ホノルル美術館など日本版画が多数収蔵されている海外の主要美術館での作品・資料調査を中心とした）

(3) 作家交流の実態調査（日米の作家交流を探るため、関係作家が残した日記や書簡など文字資料の収集、作家および遺族・関係者からの聞き取り調査。1950年代～60年代に版画家が実地指導を行ったシアトル・ワシントン大学を中心とした）

(1)～(3)の調査研究に加えて、英語圏で広く読まれたと考えられる英語版の日本版画技法書の収集も行った。

4. 研究成果:

(1) 展覧会

1945年から1970年の間に海外で開催された日本版画展一覧、国際展に出品された日本の版画作品のリストを作成。その結果、1951年サンフランシスコ講和条約締結によって日本の占領が解除されるのにもなって海外における版画展の数が増加している事実が判明した。詳しい状況については（雑誌論文②）で論じたが、その理由として、高まる日本文化への関心とともに、版画作品の輸送の簡便さという性質から戦後世界各地で国際版画展が創設され、版画そのものが国際美術交流の一役を担っていたという状況が挙げられる。

こうした中で、たとえば1956年のベネチア・ビエンナーレで版画大賞を受賞した棟方志功のように、特に日本的技法による木版画が国際的に高い評価を獲得し、その評価が最終的に国内での版画の評価にも反映されたと考えられる。1957年から始まる東京国際版画ビエンナーレ開催もその一つの表れといえよう。

(2) 欧米人コレクター・美術関係者

占領期を中心とする欧米人コレクター、美術関係者リストを作成。その中でも重要な役割を果たしたオリヴァー・スタッター（Oliver Statler）については、研究協力者の猿渡紀代子氏と協力して、1956年に出版された『Modern Japanese Prints: An Art Reborn』の日本語版を刊行した。（図書⑤）スタッターの著書は、日本国内でもほとんど研究のなかった1950年代に、日本現代版画に関する論考を英文で発表したもので、日本国内のみならず海外の版画愛好家の開拓にも貢献した重要な文献である。同書の日本語版出版に際しては、海外研究協力者・味岡千晶氏の執筆編集によるスタッター年譜とともに研究代表者によるスタッターの業績に関する論文も収録、英文の抜き刷りを別に作成し、海外の研究者に送付した。（図書⑥）

また、1947年から日本に住み、ジャパントイムズ美術批評を手がけたエリーズ・グリリ（Elise Grilli）については、御子息のピーター・グリリ氏（Peter Grilli）にインタビューを行うと同時に、同氏が所蔵していた新聞掲載記事コピーの提供を受け、その一覧表を作成した。

さらにCIEの展覧会企画を担当し、のちにフランネル・ギャラリー（Franel Gallery）で日本版画の販売を行い、『Who's Who in Modern Japanese Prints』（1975年）を出版した美術家フランシス・ブレイクモア（Frances Blakemore）については、『An American Artist in Tokyo: Frances Blakemore』の著者森岡三千代氏の協力を得て、シアトルにあるブレ

イクモア財団所蔵資料の調査を行うと同時に、同財団会長で日本版画のコレクターでもあるグリフィス・ウェイ氏(Griffith Way)およびパトリシア夫人(Patricia Way)にインタビューを行い、ブレイクモアの日本での活動の実際を知ることができた。

この他、1950年代、60年代に日本版画の収集を行ったロバート・ベルジェス氏(Robert Verzes)、グッド夫妻(George and Marcia Good)、ジュダ夫妻(Felix and Helen Juda)のキュレーターを務めたアイリーン・ドロリー氏(Irene Drori)にも、版画収集の経緯についてインタビューを行った。

以上のような調査を通して判明したのは、占領期から日本に在留して日本版画の収集や研究を行った欧米人の普及活動が、1950年代から60年代にかけて幅広い日本版画愛好家を生み、国内外の日本版画ブームを現出させる一因となったということである。

(3) 作家交流

(1)(2)で記したように、1950年代から60年代にかけて欧米人の間で日本版画収集熱が盛り上がる一方、国際美術展では日本の版画家が次々と賞を獲得した。こうした状況を受けて、1950年代後半から斎藤清、棟方志功、関野準一郎ら木版画家がアメリカ国務省やジャパン・ソサエティなどの招聘のもと渡米し、日本版画の実地指導を行うこととなる。

その中心都市となったのがシアトルである。現地での調査に先立っては、福島県立美術館学芸員の方から斎藤清に関する情報提供、関野準一郎ご遺族から渡米期の日記の提供を受け、両作家の渡米中の活動について新しい事実を確認した。

現地調査ではそれを基に、シアトルのワシントン大学で当時斎藤・関野に木版を習った元美術学校生(Barbara Bruch, Iris Nichols)の方々から授業の内容、木版画制作を体験した際の感想などについて聞き取り調査を行った。さらに、斎藤と関野を含めた日本人作家をサポートした現地の作家・ギャラリーなどのネットワークを調査するために、ポール堀内夫人(Bernadette Horiuchi)、キャロリン・ステイリー氏(Carolyn Staley)にインタビューを行い、資料の提供を受けた。また、斎藤、関野がいずれも滞在中、ワシントン大学美術学校教授のグレン・アルプス(Glen Alps)にコラグラフを学び、個展も開催していることから、グレン・アルプスと親しかったデイビッド・マーティン氏(David Martin)にインタビューを行うとともに、ワシントン大学図書館所蔵の貴重資料および大学付属美術館のヘンリー・アート・ギャラリーの所蔵作品調査も行った。

その結果、シアトルの美術学校では日本の伝統的木版技術が教授され、逆に日本の木版

画家はコラグラフという新しい版画技法を学ぶという、相互の関係があったことが判明した。また、日本とシアトルの作家交流を考える上で特に重要な役割を果たしたのが斎藤清であり、彼はシアトルの作家のグループ展を銀座の画廊で開催する橋渡し役も務めていたと考えられる。

この他、作家交流という視点から、サンタバーバラ在住のロバートソン夫妻(Ronald and Helen Robertson)にもインタビューを行った。夫妻は1956年から1966年まで東京に住み、美術家であるロバートソン氏は養清堂画廊で個展、それをきっかけとして日本木版の技法書『Contemporary Printmaking in Japan』を1965年に出版した。同書執筆のために萩原英雄や北岡文雄、田島宏行らのアトリエを訪れ、木版技法を学んだという。

なお、彼らが最初に日本で購入した作品は古川龍生の木版画であったが、それは1957年に開催されたCWAJ(College Women's Association of Japan)第2回展でのことであり、CWAJ版画展が日本在住の欧米人コレクターや作家に日本版画作品の紹介と情報を提供する場として機能していたことが確認された。

1960年代にはロバートソン氏の書籍以外に、吉田遠志と由木礼による共著『Japanese Print Making』(1966年)や徳力富吉郎『版画入門(英語版)』(1968年)など、英語による日本版画技法書が相次いで出版されている。これは欧米人の間で日本の木版画技法学習への需要が高まっていたことの裏返しと見なすことができよう。

以上、(1)展覧会(2)コレクター(3)作家交流という3つの側面から、戦後日本版画が世界へと進出する状況とその実態について迫ることができたと考える。

なお、1945年から1970年の間に海外で開催された日本版画展リスト、占領期を中心とする欧米人コレクター・美術関係者リストは、今後報告書としてまとめ、一般に公表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- ① 桑原規子「2009年の歴史学界 回顧と展望 近現代美術史」『史学雑誌』(無)第119編第5号 2010年5月(181-184)
- ② 桑原規子「戦後日本版画の世界進出—占領期から東京国際版画ビエンナーレ創設まで—」『聖徳大学言語文化

研究所論叢』(無) 第 16 号 2009
(139-172)

[図書] (計 6 件)

- ① 『恩地孝四郎 装本の業』三省堂出版
(2011) 恩地邦郎監修、畦地梅太郎、瀬
木慎一、外山滋比古、桑原規子、執筆担
当: 「恩地孝四郎の装本と芸術」 198-200
- ② 五十殿利治、桑原規子ほか『帝国と美術
—1930 年代日本の美術戦略』国書刊行会
(2010)、執筆担当: 「国際文化事業から
対外文化工作へ—1941 年の国際文化振興
会主催『仏印巡回現代日本画展覧会』」
259-303
- ③ 「駒井哲郎展」図録、桑原規子執筆担当:
関係作家解説、資生堂企業文化部発行
(2010)
- ④ 『美術批評家著作選集第 2 巻 佐波甫』
ゆまに書房 (2010)、桑原規子編纂および
評伝・解題・主要著作目録執筆担当、全
449 頁
- ⑤ オリヴァー・スタットラー著『よみがえ
った芸術 日本の現代版画』玲風書房
(2009)、猿渡紀代子監修、CWAJ 翻訳、桑
原規子執筆担当: 「オリヴァー・スタット
ラー: 戦後日本版画に果たした役割」
238-250
- ⑥ Noriko Kuwahara: Oliver Statler and
Japanese Prints during the Postwar
Period (⑤の英語版、別刷り)

[その他]

講演 (計 2 件)

- ① 桑原規子、近代版画史の中の川上澄生—
恩地孝四郎との比較から、川上澄生展特
別講演会、2010 年 11 月 28 日、於栃木県
立美術館
- ② 桑原規子、恩地孝四郎と室生犀星の交流
—『感情』時代を中心に、装幀の美: 恩
地孝四郎と犀星の饗宴展講演会、2009 年
10 月 17 日、於室生犀星記念館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桑原 規子 (KUWAHARA NORIKO)
聖徳大学・人文学部・准教授
研究者番号: 90364976

(2) 共同研究者 なし

(3) 連携研究者 なし

研究協力者

味岡千晶

日本美術コンサルタント (在シドニー)

猿渡紀代子

横浜美術館特任研究員

竹村さわ子

ホノルル美術館アシスタント・キュレー
ター (在ホノルル)